

外地二年、内地三年の九五五年の間、実弾を撃つたのは小幡カ原射撃場で十発、南京の射撃場で十発だけで。

戦争とは互いに殺し合うものなるも、一人も殺すことなく終わったことに悔いはない。

今はただ戦没者の御冥福をひたすら祈るのみである。

中支戦線幾山河

一 鉄道兵の足跡

香川県 平田 雅仁

私は昭和十六年一月二十四日、現役兵として鉄道第四連隊第五中隊に入営した。それまでの職歴は次のごとくである。昭和十三年三月三十一日、広島鉄道局高松出張所、松山保線区工事工手としての試傭採用に始まる。一年後技術雇員、広鉄局工務部臨時技術員、広鉄局保線課勤務であったが、昭和十六年一月十五日入営のため休務となった。

一月二十六日、宇品港を出帆、朝鮮羅津上陸。同日

鮮満国境図們通過。二月一日駐屯地牡丹江着、以後同地付近の整備。

十七年六月八日、中支派遣のため牡丹江出發、六月十五日杭州着、七月十九日金華着、作戰参加後、金華野戦病院入院、習志野陸軍病院転院。

十八年三月治愈退院、原隊復帰。

十九年二月鉄道連隊臨時編成、五月独立鉄道第一工務大隊編入。編成完結まで編成業務に従事。駐屯地津田沼出發、五月三十一日博多出帆、釜山上陸、安東通過（鮮満国境）、満支国境山海関通過し、南京經由武昌着は六月十七日であり、同地に在って次期作戰準備。

七月九日武昌發、二十一日長沙通過、八月株州着、同日より同地に在りて粵漢鉄道開拓準備作業に従事、十八日株州發、九月十二日まで、朱亭付近の戦闘に参加。

以後湘桂作戰、大陸打通鉄道建設、修復、輸送業務に従事したのであるが、終戦。内地復員に至る間、私は中支の山河を、鉄道隊員として転戦した足跡を、断片的ではあるが体験記として記述してみた。

終戦以来、星霜移りて五十年、往時は渺茫ひょうぼうとして

すべて夢のごとくであり、若かりし将兵も将に老いに到らんとしている。一鉄道兵の活躍と哀歎を述べようとするが、資料も既に乏しく、推敲もまた困難である。

行軍

歩兵の表芸というか本分は、射撃、銃剣術、行軍であるという。行軍とは軍隊の隊列行進であり、広義にはその歩行移動をも指すが、遠距離が多く、歩兵といえども最も苦痛である。特に武装しての戦地の行軍は、肩もたわみ、足も重くなる。まして我々鉄道兵には耐えられぬ苦痛である。最初は軍歌を歌ったり、身近な話にオダを上げている兵隊も、二時間もすると、口を動かさぬようになり、只管に黙々と、歩くのみとなる。

湖南戦線で私がバテ、アゴを出しながら、行軍しているとき、私の小隊の大男の某上等兵と一緒にいた。彼は、銃を背囊の上に横に載せ、勇気凛々、軍靴も軽く颯爽たる英姿である。彼いわく「このくらいに行軍は物の数ではない。徐州開戦では、オツ広げて、両方共抛り出して歩いたもんじゃ、何様、陰金で、ドイツもコイツも、腫れ上がって、歩く度に擦れてサ、サッ

パリよ……、お天道様に丸干しじゃ」。私も、ちよつと間を置いて、彼の言葉の内容が分かったが、私も心中「さもありなん」と思う。

なお、会戦とは、彼我攻撃を意図する大兵力の戦闘で、相当の期間の経過があるという。鉄道兵の携帯用兵器として、手旗（赤と緑の一流れで、白はこのときはない）、折尺、巻尺、鋸、斧、釘着植、軌間定規と鹿足挺（二分割可）などがある。

私はこのときは片手にハンマーであった。各兵科によつて、正規の軍装の他に、携行品があるらしいが、浙贛作戦ではなかった。

昼夜兼行の行軍でも二日が限界で、三日目は眠りながら歩いていたのでしようか、前に進まぬ夢を見て、ひよつと気が付くと、田植えの終わつたばかりの水田の中に十メートルくらい迷い込んで、電信柱と相撲を取っている。イヤ、ハヤ、笑うに笑えぬ笑い話である。しかも頭上には太陽が燦々と輝いているではないか。

この辺は山間の谷間で、池や民家も二、三あり、日本にもよくある平凡な風景の所。中国の田舎で、今ま

で電柱もない所なのに、こんな所に電信柱がなぜあるのか？ 今考えて見ると、鉄道通信隊の電柱の伐り残しだったのでしようし、水田も二毛作地帯だったのでしよう。

馬のいる部隊は、馬の尻尾を握っていれば夜眼も利くし、馬に任せてこのような時でも、頂好(テンハオ)だそうだ。「馬や車に装具(軍装品を含め、携行品一式)を預け、ホテホテではないか」「うん、所が癖の悪い奴は蹴るし、水も飯も兵隊様より先にして、大切にしてやらねばならぬし……」それぞれ苦もあれば、楽もあるものだ。

仮纏帯所

昭和十九年七月、中国湖南省。夜行軍で前線追及中、草地を見付け夏のこととて、行軍の軍装を緩めたまま就寝。翌朝、朝露を含んで黝^{くろ}んだ芝に乾いた所がクツキリと残っている。私自身の夜露の痕らしく、慌てて軍衣の半袖から出ている腕を擦ると、シットリとしている。特に、行軍中の兵隊は下痢が多く、腹ピーとい

う状態が続く。中支以南は消化器系、満州は呼吸器系疾患が多いようだ。

広潤な空地は疎らな土葬の墓地で、花崗岩の自然石を墓標にしたのも多く、その石際の芝は特に成長が良

い。
この付近で戦闘が行われたらしく、葉莢も散乱している。すぐ前の大きな石に、板を横に「仮纏帯所」と矢印をした標板があり、進行方向でもあるので、魔除けの六地藏様を横に、そのまま東行。その路はすぐ部落で、南北の路と、三叉路となつて行き止まり。さて、右にすべきか、左にすべきか。道案内もなく、私の感では右である。このような時が非常に多く、念のため、道をよく見ると、左に日本兵の軍靴の跡がないので安心して右に曲がると、角は雑貨店。北支、満州は満糞棧だが、北の中支では何というのだろうか、前の家との路上に、日除けの蓆を取付け、商売も盛大だが、急な避難だったらしい。食物が残っているかと思ひ、緩歩しながら隣のその店の倉庫らしいのをのぞくと、その薄暗い倉庫に、何とミイラ(人の死体のそのまま乾

燥したものの！）、一瞬ギョツとして、入口の札を見るとここが假纒帯所であった。

私などは思わず肩の銃を握り締め、足早に立ち去る。中国軍は死体収容もできかねて撤退したのでしよう。

日本軍も中国軍も假纒帯所の字句は同じらしい。

ここ湖南省汨水上流の山間部では、敵機の空襲と酷暑を避け、夜行軍も多い。後方から、夜間ながら、それと知れる気合の掛かった部隊が、私たちを追い抜いて前線へ急行している。この連中に巻き込まれぬよう、やや遅い速度で同行することにする。

輜重隊か砲隊か、馬が車両を牽引して、とにもかくにも、前線へ急行の気配が、他部隊の我々にも、夜目でもひしひしと伝わる。ところがこの段列が停止して動かない。その横をすり抜けながら、停止の先頭に通り合わせると、軍公路の泥濘地に車輪を、めり込ませ脱出に必死の努力をしている。

やや先行して休憩していると、脱出行のこの部隊も休憩に入る。「何部隊ですか」と尋ねると、「三島の野獣だ」という。野獣とは妙な部隊、さらに尋ねると

「三島の野戦重砲だ、衡陽攻城のため、急行中だ、友軍は我々の到着を待っている」と、八頭立ての、口径二十センチとかの野戦重砲は、私たちを残して勇躍出発して行った。軍隊の常套語である「御苦労様」の声で我々は彼らを送った。

その峠を登り切った所で、ワーン、ワーンと敵機の来襲である。野戦の王者、野戦重砲も航空機には弱い。峠から見下ろしていると、敵機は我が軍の推定位置を想定し、パラシュート付きマグネシウム照明弾を落下、一発で満月の五倍くらいに三分間照明される。

民家らしい所から、狼煙（おとし）（打上げ花火）が上がり、その付近にさらに一発。攻撃目標を教えているのだ。重砲は公路より外へは出られないだろうと、敵機にとっては移動中の重砲を絶好の鴨（中国では猪という）である。

執拗（とつとつ）にロータリー式の波状攻撃を行い、旋回しては私のいる峠より、重砲の段列に突っ込んで行く。幸いに我々は攻撃を受けなかったが、その情景を峠から痛ましく見下ろしていると、敵サン、今度は何を思った

か峠の地面に来るので慌てて周囲を見渡すと、何と禿山で木は一本もない。

五メートルくらい横にお地藏様があるが、その陰に逃げ込む余裕もないので仕方なく戦友の鈴木と二人でお地藏様の真似をしていると、バリッバリッと、五、六発の試射。お地藏様と敵機と交互に横眼で見て逃げ込む機会をうかがいながら相変わらず動かない私たちを敵機は見逃したのか、あるいは大きな目標を狙っていたのかは分からないが、お陰でその後は射撃を私にはしなかった。まさに「一兵者死地也」。

照明弾のマグネシウムの青白いメタリック光線に浮かび、オレンジ色の室内照明や、赤、青、黄に、あるいは点滅する誘導灯、航行灯の煌なる敵機、複座（二人乗り）の翼の付け根よりの排気の火焰が印象的で、戦闘をしている飛行機には見えないで、幻想的な世界に誘われる。その幻想をつん裂くのは双方の曳光弾、揺り動かすのは彼我の砲声であった。

ようやく米軍機は硝煙と戦戟と排気音を残して去っていった。不死身の野戦重砲は、激戦地衡陽城の空を

にらみ、戦いの幕は静かに下り、照明は消え、闇の世界へと戻っていった。我々には大きな犠牲もなく空襲は悪夢のごとく去り、我々はまた前線へと進んでいった。

初 陣

戦闘部隊でない鉄道兵の我々に対し敵の攻撃が仕掛けられた。戦陣は逐次過酷の度を加えてきた。

山上の友軍陣地には、喚声も起こり、乱戦。その応援に宿舎を出た途端「ビューン」。最初は高音で、低音の余韻を残す。これは波動の相對運動時の観測誤差現象で、光線にもある。すぐ、南に線路を渡り、山に登り出すと、もう一発「ビューン」。

何だか、どの弾も、私を狙っているようで命中すれば、一巻の終わりだと思うと、思わずヘナヘナとなつて、前屈みに手を使って四つ足だ。この位の山がなぜ両足だけで、歩けないのかと不思議に思いながら、三、四分攀じ登ると立ち上がれるようになる。恥ずかしさが、腰が抜けていたらしく、他の兵隊も最初は同様

だそうだ。何も恐れる必要なく、これは山越えへの流れ弾。山上の配置について二日くらいは、今度は逆に動作が大きくなった。

近接戦特有の即死に近い戦死者を出すにつれ弾道の推理も身につつき、地形、地物の利用も上手になるが、これは確率で絶対ではなく、演習と実戦との差はこの点である。そして、演習の状況終わりの嗽ちゅばは鳴らず、死闘は延々と続く。銃弾は近づくに従い、「ピュン」、「ピシッ」と余韻がなくなる。地表近く、あるいは跳弾も撃ち込む敵は冷静で危険だが、この敵も浮き足立って、逃げる時が必ずある。

信は「力」也。されば、不敗を信じて戦う者勁し。九月十二日、午前十時、敵は三角山より東へ撤退しつつあり、との情報。私は山上に登って、状況を観察したいが、空腹でとても登れない。敵の封鎖網も破れ、一陽来復。翌日より、食糧補給を兼ねて、討伐作戦だ。我々の宿舎の前の道を東へ、「誰何」すいかされた、石川隊の分哨を左に、朱亭東橋梁や、独立している農小屋を、感慨を込めて眺める。

後の話だが、この東橋梁は、よくよく鉄道隊には、付いてなく、熊倉隊が、運転勤務を終わり、私も平田の重修理中、前線追送中の弾薬満載の軽列車が、この橋梁上で脱線転覆、積載の火薬、砲弾に誘爆。二、三日間近奇れなかつたわく付きの橋梁にもなった。

鉄道線路を南へ渡ると、溪谷の感じの川の対岸、突出部に三軒の民家。敵はこの民家の庭先に重機関銃陣地を、構築して脱出行の日本軍に暗夜の掃射。あらかじめ、照準してあつたらしく、弾着は正確。陣地の場所としては最高だろう。少し歩いて緩やかな山路。日本の関西に多い、茶色の粘土質の径みちの両側は茶畑。

雨も晴れて、空は初秋の気配、ピクニック気分満溢みちみ、松もこの付近では多いが、中国の他地域では、珍しい。

遭遇戦

茶山掘で食糧調達（徴発）のため、駅南方二キロの径を清水と二名で歩いていると、前方より日本兵が三人、血相変えて走って来る。ただならぬ気配なので尋ねると、「中国兵だ」と南の方向を指差している。こ

の三人は運転班らしく、顔は見覚えがあり嘘でもないらしい。即座に、銃の安全装置を外しながら、ここは状況も良いのに……と、そのままの姿勢で、その方向を眺めていると、「ピューン」「パン」と敵方より斉射。立ったままの便衣(現地人の平服で、男女共藍色)で三名、武器はピストル、二百メートル。ピストルとは大した武器だ。正規軍が遊撃隊(ゲリラ)として、情報収集していたのに遭遇したのでしょうか。我々も立ち姿のまま、応射(立射という)、このような戦闘方式も遭遇戦というのですが、機先を制せられたようで心理上の不利は否めない。ピューン、パンはそれぞれ銃弾の飛翔音と射出音で、敵方のピストルは殺傷力が弱くて、弾道も高く、私も私で、射撃する小銃弾が届かないような気がして目標高の三倍ぐらいの所を、漠然と照準して威嚇弾を送っている。

日常の行動は武装しているときでも、ここは状況が良いので、重い小銃弾は十発ぐらいしか持っていない。他に小銃の弾倉に五発ある。伏射で本格的にと思っっているうちに、敵は退却したので、私たちも戦争が目的

ではないので、その日は宿舎に引き揚げた。次回から携行は、三十発にしようと思った。

空襲

昭和十九年末、茶山掘の運転勤務を申し送り、中隊本部の進出している平田部落に復帰。この径間二〇メートル、高さ一〇メートルの橋梁は、爆破されて、臨時に水面すれすれにまで、70度ぐらいの急勾配で線路を下げて運転しているから深夜軽列車の後押し人夫の出勤、督励などで、余分の手間がかかるし、鉄道輸送の隘路あいちうの一つにもなっている。正規の勾配は13度。

修復工事は昼間、現地人五〇名と、同数の兵隊で、従事。今日は、対空監視哨だ。南岸、上流側の橋台すぐ脇に、蜻壺と呼ばれている防空壕(穴)に入って、英国、ブローニング二〇連発、軽機関銃を点検、この時は戦利品の予備弾倉と銃弾もあるから、心強い。

二、三小隊の橋梁修理現場の南大堡方面で、三機編隊の敵機が、入れ替わり何かを、爆撃している様子。直ぐ、報告するも、空襲は毎度で、その度に避難する

のでは、作業も進捗しない。と、急に峠の線路より、敵機が……、再び「空襲」「空襲」。

全員、思い思いの方向に散開しきらないうちに敵機は、バリバリ。他の二機は、別の目標に飛んで行つたのか、一機だけが、再び旋回して私に直進して来る。作業員は地面に伏せたまま、身動きもできなく、遮蔽物もない。

黒い塊を落した敵機は、東より西に一直線に頭上五メートルの方向。思わず機銃の引き金に力が入るが、撃墜の方向に、作業員が伏せている。操縦士は若く、排気ガスの熱気を感じた途端ドカン、と地面が揺れる。焼夷弾だったので、火焰もうもう、しかし、生の太い松丸太を使っているのでピクともしない。そろそろと、扶子（人夫）が出て来て、お互いの無事を喜び、爆撃の跡を見ている。焼夷弾は、一斗瓶ぐらいで、外殻は裂けてそのまま残っている。

休憩時間に若い現地人が、その十ミリ厚さの一斗瓶を欲しいと遠慮しながら申し出る。鍛冶屋で、鋤や鍬にする由、敵方に渡り、手榴弾になる危険もあるが、

快諾する。

次の空襲からは、早目に退避して鉄道線路に、仰向けに伏せていると、高空より爆弾、プルシアンブルーに澄み切った冬空に空気を裂き、キラキラと陽光に反映している。どうか近くに落ちないよう、南無、金比羅大権現と必死で念じていると、爆弾は真上に来る。そうなる、現金なもの、立ち上がって見ていると、警備隊、中隊本部の部落の傍へ落ちたが、このときも損害無し。

汨羅有情 べきら

津田沼の細貝かさいち一一同年兵と歓を尽くし、
兩人対酌すれば山花開く、一杯、一杯、また一杯と、李白の心境。

この良き日の良き酒を心で温め、汨羅駅を出発との期待は、汨羅橋梁不通のため、延期。

駅より北の橋梁へ約五〇〇メートル、線路に沿って左に二階建てのような窓のない、高い倉庫風の民家。その手前で線路から西へダラダラと下ると、すぐ十軒

くらの集落というよりも、「家の集まり」があつて、焼けてはいないが、荒れて人の気配はさらになく、我れ慄然とす。中隊はここで空襲待避を兼ねて分宿する。どうも、春の前線は我々の一行よりも、何倍も早い速度で北上しているらしく、淡雪の塗田も、ここ、汨羅では春は足下にあつて、すでに十分。このころの水は冷たく清らかだ、キラキラと、チヨロチヨロとあるいは涓々、滾々たる瀬音。気温は既にながつていて、早い野萌えの草を摘むのも面白く、大の兵士が幼稚園の遠足のように、飯事の食事。

部落中央北部にすぐ隣接して、墓地の土饅頭があつて、桃だろうか、樹々がなんとなくなく、桃色に霞んで、その遙かに、盛り上がった堤は汨水だろう。

北支、満州に多い部落周囲の土壁もなく、南西隅にわずかに楠の大木が亭々と一本、その幹により沿つて「ざざれ石」で造つた小さな祠。その半開きの石の扉から覗いている白紙は御神体だろうか、木版の武将の刷絵は関羽。この集落の平安を祈る心底あわれ、土に生き、土に帰る農民。名もなく、貧しく、されど逞し

い農民。戦火を避け、疎開しているだろう。「土に生きる人々」にも、啓蟄は、もうすぐそこだ。汨羅、三月、花将に発せんとす。二十年のこの旧曆三月三日の、桃の節句が妙に印象的で汨羅の畔に戦塵を濺ぎつつあり。

蝗軍来り

昭和二十年七月初めころ、浦口鎮では蝗（いなご）が散見される。この盛夏に、中国には、日本の蝗のようなのがあるのか、気にかげずにいたら、一日一日と増え出して、現地人も大騒ぎ。兵隊にはこのようなことは経験がなく、パール・バック女史の「大地」にも詳しく書いてあつたが、眼前で見るのは非常に興味深い。波状攻撃という表現が、ピツタリで、空中三〇メートルから、地表まで、ザワザワと一群が北西より南北へ、何群も通過して、青い物は木の葉まで食べ尽くすから、野菜類は皆無。群の一回の飛翔距離は一五〇メートル前後。日蝕のように暗くはないが、晴天が曇天には充分なる。津浦線の火（汽）車は、蝗の羽根で空転して撒砂しながら、喘いで進行。二週間で蝗軍は

南京の方へ飛んで見えなくなつた。このときは野菜畑格も平常らしいし、樹々もすぐ緑になつた。

中国の現地紙が一部、中隊に配達されるのを回覧すると、蝗軍来り！被害甚大、狂悪至極とあり、日本軍の別称は皇軍。日本軍に反抗的表現であるので、憲兵隊も対策を考えてはいるのですが、蝗の替え字が見当たらないのが弱い。

二十年八月十日ごろ

広島に新型爆弾が投下され、その威力は絶大と、抽象的な記事が日本紙に掲載された。配達されて毎日回覧されるのを見ているとその日を境に論調が、戦争遂行、戦意昂揚から日本民族の繁栄と独立、国体護持にと微妙に変化して、不審感を生ず。

別に悪い事でなく、否、むしろ当然であるが、何だか、乗船が大きな舵をとつたようだと感じる。現地中国新聞には、そのような変化は感じない。一体、どこが、何で、どうなつてゐるのでしょうか？

晴天の霹靂

蝗害も治まり、器材も揃い、資材も集まり、作業も軌道にのり、隊も一息入れる。八月十四日、十五、十六日の三班に分かれて南京城内への外出に決定する。第二班の十五日組も、今日は珍しく定期券くらいの外出許可証明書持参で、浦鎮駅より出発。私は第三班の明十六日組だ。

十五日正午より、陛下の重大放送があるとの予告があつたので、昼食も匆匆に、作戦班長の高橋曹長の指揮で兵員一同、作業場に北向きに整列して小机に對す。どこで都合をつけたのか、えび茶の厚手の布地にラジオを載せてある。

ややあつて、放送が始まつたが、急に雑音が多くなり、その内容も聞き取り難い。玉音放送に接するのは初めてで、敵の謀略かとも疑う。途切れ勝ちの内容を推定して、停戦協定成立？ とよい方向に解釈して、自分自身を納得させる。

他の者も同感らしく、停戦協定締結を口にはしているが、胸底には「どうも、敗戦かもしれぬ」との直感

も否めず。言葉もややもすれば、途切れる。しかし、事は急を要するので、居合わせた主な連中が、五、六名相談する。

一、放送は現地人には秘す。

一、直ちに、器材撤収、資材整頓。

一、原状に復帰。

即座に、人員を集め、今までと正反対に、穴の埋戻し、レール取外し、器材梱包などなど殺気立つて尋常でない。勤勞奉仕隊や、苦力にも日本兵の行動は、不審に思えたでしょう。そして、心配して「先生、脳天破了」と日本兵の仕草を真似て、右手を頭の横で、左巻きにして見せる。「明白、不真」判っている、話をするな）今の今まで、丁重だった日本兵が何を血迷ったか、突如、理由の説明も一切無く、建設の正反対の行動を集団で行い、質問をしては、怒られ動作が慢々^{まんな}のと叱られる。

東、浦口鎮村落を眺めると、現地人が忙しく走り回り出した。『ワーン』と騒音らしいのも聞こえるようだ。恐らく、日本負けた、どうするべえーと、兵隊は

中国人の知らない内にと、原状復帰を急いでいるのだ。

どうにか、作業も終わり、現地人は解散させ、兵隊だけになると、ホッとして、今後の処理や故国、日本の事が気になり出す。兵隊間にも流言飛語が飛び交う。曰く、男は金玉を抜かれて、豪州へ流される。支那派遣軍は敗戦していないから、独力で、一戦を交える。とか、決戦への慣性は、容易な事では止まらず、まして、勝ち戦だった。しかし、南京に近い故かこの日一日だけで豪州説はなくなり、勅使の派遣もあり降服不諾説も三日で終わった。一段と激しい街の騒乱を他所に、兵は黙々として、思考に耽る。

傍らのアンペラ囲いの工所用変圧器は、微かに唸りをあげ、兵の決断を促す。長い日差しも傾き、草にすだく虫の音を後に蕭々と隊伍を組み、宿舎に向かう兵たち。

私たちを見守る現地人には、特別の表情も動作も、この時には既に現れないが、よく見ると気の毒そうな目付きである。それとも私たちの思い違いだろうか。

残務整理

終戦後も当分の間、残務整理のため、作業場に通う。勤勞奉仕隊はもう、出て来ないが、五百人の苦力くろりは相変わらず、居残っている。この人々に、今までの協力を謝し、小麦粉の入った布袋を各人持てるだけ持って退散を通告する。量の少ない高価な適当な物も見当らないし軍の必要もあるので、小麦粉となったのでしよう。

「我門、飯、没有、ガンホー」(私たち、御飯食べられないので、働きたい)、協力もありがたいし、その事情もよく分かるが、そうも言っていられないし、辛いのは日本軍だ。日本の民家二軒くらいにいったばいあるその小麦粉の山に取り付いた兵隊が、一列に並んだ苦力の列の一ずつにその肩に載せてやる。欲の少ないのは三袋、多いのは五袋。大きさは日本のと全く同じだ。その五袋は少しヒョロヒョロ歩いて、もう投げ出して、道の端で休憩している。このようなときは日本兵も同じで、私も三袋でしょう。その日の内に、気の利いた者はあいさつして、九割はいなくなつたが、後、五〇

人は自炊しながら、今後の相談をしているのでしよう。小麦粉はまだ半分は残っていた。

私たちも、中国人接収家屋を引き払い、浦口工場近くの中国の幼稚園に移転、ここは当地区に移駐した当初も、一週間くらいいた所である。南、工場側に隣接して、日本人従業員宿舎があるので便利だが、便所も机も、万事、寸法が小さく戎衣(軍服)も大弱り。

歓迎復員

昭和二十年十月ころ、浦口鉄道工場内宿舎を引き払い、堯化門野営地に向かうべく、浦鎮駅より、無蓋貨車に乗車。駅の運賃表は、数次の価格変更で白墨書き。日本人駅職員は未だ残留していて、この駅では、駅長、助役は日本人だ。鉄道輸送も、終戦後は一般輸送は停止して、専ら、日本人の復員、帰還列車となっている。

二キロ南下して浦口駅。津浦線の終点で、側線十五本くらい。連絡船によらず、貨車に乗車のまま、浦口駅構内下流側より航送船に乗る。川幅は一キロ強。平均水深一〇メートル、深い所は二〇メートルもあるだ

ろう。今は流速毎秒五〇センチ。この長江（揚子江）は、ここでは水底ほど、流れが早く飛び込んだら生きては再び浮き上がらないそうだ。

日本人は、泳ぐのを好み、上手だから日本兵は泳ぎたくなるだろうが、泳いだ者はない。輸送船の舷側から、水流を眺めていると、菰巻きが、時々流れているので、尋ねると水死体だ。

この航送、連絡船は、日本の下関―門司の連絡船と、規模、様式は同じで、航送船を使用。乗客用の連絡船は、下関站（南京駅）であるが、航送船は一・五キロ下流の専用棧橋に入構。両側は低湿地帯で養魚場あり。坂下部隊の後続を待つて、ここで二時間停車、集結を終わって、一列車を編成、発車。右に近く南京城壁、それに並行してすぐ、和平門駅。停車すると、小孩（子供）が直ぐ近づいて来て、「日本、マケタ、パカヤロウ」日本兵の編上靴、雑囊、横かぶりの軍帽。情けない光景だ。日本の戦災孤児も同じ。この年ごろはどここの国でも憎まれ口を叩く。その後方の民家に、文字の国らしく、歓迎復員の横右書きの四文字。

凱旋は知っているが、動員の逆は復員か、中国人も日本兵の復員を喜んでると、嬉しく思っていると、傍らの彼は、中国兵の復員だ。しばらく停車していると、分別盛りの中国人が、この人たち個人は悪くはない。中国人にも悪いのもある。と諭して子供を退散させた。

蝸牛の兵隊

終戦になって旧正月も近づいた、南京市内。胡同とこのか、斜巷というか、繁華街を歩いて見物。正月の準備に忙しそうな露地は、平素でも活気で、支那人の生活力に圧倒されるが、日本軍の敗戦で、一段と賑やかならしい。

赤い蠟燭、蒸し饅頭、豚料理、爆竹、飾り物と盛り沢山だ。とある商家で、まだ通用している儲備券で少々のお買物をして、「忙しそうだね」と手真似すると、「先生、見てくれ、明天、中国兵、来る中国の兵隊」「それはおめでとう」。

この中国兵は、堯化門の我々の收容所にも来たが、

程度は余り良くない。それからしばらくして又、南京糧秣受領を兼ねて南京城内行き。この前の民家に立ち寄ると、西洋人のように肩を窄め、「先生、聞いてくれ、あの連中、駄目、城内に入る。キヨロキヨロ、それから、錢莊（銀行）、鉄砲」札束を懐に入れる、指輪を指に入れる、そのような身振りをしてから、「姑娘の尻なでる。物、買う、金払わない。街の有力者、蒋介石へ電報。蒋介石カンカン、南京で、それでは中国の恥。あの連中、それから三日」。日本の占領も長いし、商人は言葉をすぐ覚える。

米軍の上級司令部が、極めて小人数、進駐して、重慶と無線連絡しているらしい。それらしい一〇五ミリ無反動砲も二・三門江岸に布陣して、米軍の気配がある。この時の中国兵は、百何師と書いた背笠と番笠とを背負って、草鞋履き。四人に一挺くらいの村田銃。前から見ると、蝸牛だ。

南京より遠い山野でゲリラ化して部落を彷徨していたのが千載一遇の略奪のため、僭称して乗り込んだのである。それではと蒋介石、直系新装備の新六軍を

急派したのかもしれない。

日本進駐

昭和二十一年二月ごろ、堯化門、収容所に、中国軍監視兵が来た。今の自衛隊の制服、装備とよく似て、誇らしい様子がある。片言の日本語と筆談で、積極的に話し掛けてくる。「私たち、ヒマラヤ越へ、英豪軍訓練、装備」この部隊と戦つたらしいと感じたから、それとなく、移動経路を聞くと、湖南も入っている。
「イケネエ」、知らぬことしておく。

「私たち、日本進駐します、四国、普通寺です。貴方、どこですか」。私も四国出身とは言えない。半月くらいして、また来て、シヨンポリしているので話しかけると、「私たち、日本進駐とりやめ、奉天行きます。全滅します」と寂しそう。

思うに蒋介石は、日俘、日僑の輸送を優先して麾下部隊の戦闘配置が遅れたのだ。仇を恩で報いた大人の国。

復員して、国共の奉天会戦の記事が、しばしば載っ

ていたが、その度にあの兵士を思い出した。

復員

中国軍の検査も無事修了、更に東へ二キロ歩いて埠頭。乗船予定のリバイ船の前に一時間待機。船は二本マスト七千トンの米国戦時標準貨物船で通称LST。

このLST（上陸用舟艇）はVO27と船首側面に横書きし、リベットでなくボルトを多く多用し、当然砲金（銅と錫の合金）の使用場所でも、鉄材にし、曲面も少なくするなど、資材、労力、製作日数を節約したようである。便所は甲板上に木材で木組みをし、大小便とも舷側を伝わるのを、ホースで洗い流すようにし食事も寝所も旧軍時代と全く同一である。

午後、黄埔江の飯田棧橋を出帆、上甲板上は天気も良く、兵士でいっぱい。兵士の胸に去来するものは果たして何か、私と同じであったろう。翌日、北方海上に小島が二つ薄く見えるので船員に尋ねると「左が九州、右が四国、今鹿児島沖」。

さらに三日目、「船員さん、船が小島の間に入って

いくが座礁しなですか」。彼は私の顔を不審そうに眺め、「兵隊さん、左が四国、右が本州、ここは紀淡海峡ですよ」。ああ我亦何をか言わんや、樹間に散見するのは製塩の小屋ではないか、南岸は白浜。解纜後、一週間は検疫のために上陸できない。横須賀、横浜方面にコレラ発生との情報で、乗船者も動揺するが、田辺港よりランチが迎えに来る。

木製の棧橋より三〇人ずつ上陸。汽車の切符受領も勿々に翌日解散して、各方面行き列車に合わせて出発。上官、戦友と最後のあいさつを終える。駅の改札からは部隊編成でないから、もう民間人になったようである。列車で途中戦災を実感として味あう。高松着は昭和二十一年四月二十九日であった。

想えば、国にも、軍艦にも、あるいは兵にも運がある。順風満帆の時には、運を信じない人も一朝落魄すれば、運を云々する時もある。環境が逼迫し、流動するに従い、運の要素も多くなり、安定すれば運は小さく、未来は察知し易く、コンピュータも確率判断し易いだろう。

運と努力は混沌として、明確に分離できないし、運と思われることでも、努力で変えられることもあるし、努力しても運が悪いとしか言いようもない時もあるだろう。

実に、戦場では一秒、あるいは一尺でも運が決まる。善悪は別として、日本人や中国人は、教育や宗教に影響されて、命とか輪廻の思想があつても、運命を達観し、努力を重ねるのは人の在り方と思う。

逝く者は、斯くの如きか、夫れ、昼夜を舍かず

河流に託して、流転の人生を諷した孔子の天命を超越した次先の高い述懐だろう。

【解 説】

体験記・執筆者が昭和十七年十一月、習志野陸軍病院へ転送されるまでは、中支において鉄道連隊勤務であつたが、その時期は浙贛作戦（日本本土初空襲のB25型中型爆撃機が中支の飛行場へ着陸したため、支那派遣軍は浙江・江西省の中国軍航空基地覆滅のため作戦した）で金華付近（上海南西約三〇〇キロ）で約半

年作戦に参加したのである。

昭和十七年六月十八日浙贛作戦開始発令、八月二十日支那派遣軍反転命令。

内地勤務中、軍令陸甲第九号により臨時編成された独立鉄道第一工務大隊は五月二十三日に編成完結したが、その編成業務に従事した。

昭和十九年六月、鮮満經由中国武昌に着いて、同地で次期作戦準備、諸教育業務従事と兵籍にある。

その次期作戦とは湘桂作戦のことである。

次に湘桂作戦について概説をする。

支那事変は長期にわたつたが、その解決なくして対米英戦争に突入した。しかし、太平洋の戦勢は我が国にとり日々非にして、マリアナ諸島は逐次連合軍の侵攻を許しつつあつた。そのため昭和十九年春、中国を南北に縦貫し、仏領印度支那に通ずる一大作戦を敢行した。それにより大陸の米空軍基地を覆滅し、本土への空襲を防ぎ、また東支那海における海上交通路を確保しようとした。さらに南方軍との陸上連絡を確保す

るのもその目的であった。

作戰計画は河南省、湖南省、広西省を経て貴州省に及び、また仏印、廣東省に至るものである。総兵力約五十一万をもって重慶軍約百万を撃破、一五〇〇キロの大陸を縦貫打通しようとするものであった。

これらの作戰は、当時その全般を「一号作戰」と称し、華北における作戰を「京漢作戰（略称コ号）、華中、華南の作戰をそれぞれ「湘桂作戰」「南部粵漢^よ打通作戰」（略称ト号）と呼んだ。

したがって、この作戰完成は、コ号作戰において京漢線（北京―漢口）の修復、ト号作戰においては粵漢線（武昌―衡陽―廣東）修復貫通と湘桂線（衡陽―桂林―南寧―仏印）の建設であった。

湘桂鉄道は昭和二十年八月、衡陽―零陵―全県まで。私は最後の南行無蓋貨車（負傷兵後送用）に便乗し、前線へ復帰したのであるが、桂林、柳州までは多分開通していたのではないかと推測する。

執筆者の勤務隊の独立鉄道第一工務大隊は支那派遣軍軍直轄部隊であり、防諜号は栄第二一五一である。

また、一号作戰（大陸打通作戰）のため支那派遣軍直轄鉄道部隊には、

中支那第四鉄道監部・同鉄道第十三、同第十四連隊、独立第一・第二鉄道工務大隊・第一鉄道橋梁大隊、独立鉄道第十四・第十六大隊、第一一五・一二六・一四五・一五一・一八二・一八三・一八四・一八八・一八九停車場司令部・第十一装甲列車隊。

隸下の第六方面軍（湘桂・南部粵漢作戰担当）の直轄鉄道関係部隊は次である。

第四鉄道司令部、鉄道第一・第三・第十二・第十五連隊、第三鉄道工作隊、第一・二・三独立工作大隊、第四鉄道材料廠、第一八七・一九二・二〇・二〇二・二〇三・二〇四・二〇五停車場司令部、
第二独立鉄道橋梁大隊。

第二十三軍（南支軍）直轄部隊は鉄道第十五連隊
第一大隊

このように、鉄道連隊六個連隊を中心として鉄道関係部隊が動員されていたのであるが、執筆者平田さん

の所屬した部隊行動を同氏の軍歴により列記すると次のごとくである。

昭和十九年八月 湖南省株州（長沙南方三十キロ）

にて粵漢鉄道開拓準備作業従事。九月十二日まで昭陵、朱亭（株州南西六十キロ）の戦闘参加、九月、湖南省衡山県にて粵漢鉄道河橋梁修理、九月三十日、衡陽県茶山着、洙河―洙河内間の輸送業務。昭和二十年一月衡山県平田着大堡北橋梁重作業、二月十一日湖南省湘潭県橋頭灣、杭木材伐採、収集、軌道重修理作業。

昭和二十年一月、湘桂作戦は貴州省へ突入（第三・第十三師団）、仏印へ打通（第三十七・第二十二師団）をもって一応目的を達成した。しかし、戦局は日本本土防衛、支那大陸への連合軍逆上陸防衛のため、大本営は支那派遣軍に占領地撤退、南京、上海付近の集結を命じた。これがため執筆者の部隊の行動も、進攻から撤退集結、防御へと任務は変化している。

昭和二十年四月、漢口、五月、江蘇省浦口（南京対岸）にて津浦線（浦口―華北天津）工場拠点、洞窟建設作業。八月十五日より浦口鎮にありて付近警備、終

戦。十月二日浦口発、六日堯化門（南京―鎮江間）着。二十一年四月堯化門発―上海港出帆―田辺港上陸。

軍は南京付近までは確保し、揚子江対岸で北支への鉄道起点、浦口工場拠点とし洞窟を建設したのである。

なお、体験記中の、衡陽攻略のための三島野戦重砲の記述があるが、湘桂作戦の前段第一期は衡陽（湘桂鉄道起点―粵漢線との分岐点）攻略であったが、中国軍第十軍（方先覺軍長）の三個師一万八千の守備は固く、我が軍はこれを包囲した。しかしその完全攻略には約五十日かかった。当時主攻撃師団の第一一六師団（嵐部隊）の歩兵第一三三連隊に参加された人（三重県連会員）の話では「食無く、弾無く、棄無しの地獄の戦いであった」とのことであった。

また、中国側の「孤城衡陽血戦記」によっても、包囲下の五十日がいかに苦しかったかを知ることができる。しかし、この戦いに決着をつけたのは野戦攻城砲であった。文中に「三島（静岡県）の野戦重砲だ、衡陽攻城のため、急行中。友軍は吾々の到着を待っている」この言葉のとおり、軍は野重の到着を待って総攻

撃をかけ、衡陽を陥落したのである。

ちなみに、第十一軍（湘桂作戦の主力）の、昭和十九年九月十日（衡陽陥落後、第二期作戦発起時）の軍直轄部隊中の野戦重砲兵隊は、軍編成表によれば、野戦重砲兵第十七連隊長（佐藤平秋中佐）、独立野戦重砲兵第十五連隊長（佐々木孟久中佐）、独立重砲兵第六大隊長（内野貞利少佐）。他に独立野砲兵一個連隊、独立野砲兵三個大隊、独立山砲兵二個連隊、独立山砲兵二個大隊である。

湘桂作戦 第二期

新潟県 長 田 栄太郎

元第十三師団（鏡）歩兵第六十五連隊本部

昭和十九年八月三十日、湘桂第二期作戦が再開された。日本軍はいつまでも衡陽周辺に駐留しているわけにもいかない。長く駐留すると衡陽の人口七万、周辺

に日本軍十万、食糧は後方より補給がない、すべて現地徴発である。一刻も早く前進を開始し、敵の迎撃態勢がととのわないうちに桂林へ一歩でも近付くことが得策である。これが作戦再開の理由である。

衡陽攻略後、我が第十一軍は祁陽―零陵―全県へと進撃、これは作戦の前哨戦に相当するものであった。

我が軍は洪橋付近において中国軍を包圍殲滅する計画であった。軍は秋の日差しのないなな隊列は西に向かつて追撃戦を行った。どこまで続く果てることなき大地に、重い軍装を背負つての夜行軍が、毎日黙々として五〇キロ―六〇キロと歩き続き、所在の敵を撃破して前進する。夜行軍ばかりとは限らない、状況によっては日中行軍をしなければならない。この時は米機に狙われる最も危険なときである。制空権は完全に敵が把握して、友軍機は一機も来ることがない。空爆下の前進で桂林を目指した。突如として上空に爆音がする。兵隊は「飛行機、飛行機」と大きな声で連呼する。中国の苦力は「飛機来、飛機来」と天秤棒の荷物を捨てて身を隠す。隊列は散る。